

太平記

卷第十三

龍馬進奏の事

(前略)ある時主上馬場殿に幸成りて、また此の馬を叡覧ありけるに、諸卿皆左右に候ず。時に主上洞院の相国に向つて仰せられけるは、「古、屈産の乗、項羽が騅、一日に千里を翔る馬ありと雖も、我が朝に天馬の来る事を未だ聞かず。然るに朕が代に當つて此の馬求めざるに出で

来る。吉凶如何。」と御尋ねありけるに、相国申されけるは、「これ聖明の徳に因らずんば、天豈此の嘉瑞を降し候はんや。虞舜の代には鳳凰来り、孔子の時は麒麟出づといへり。就中天馬の聖代に来る事第一の嘉祥なり。其の故は昔周の穆王の時、驥、たう、驪、驊、騮、騄、駟、駟とて八匹の天馬來れり。穆王之れに乗つて、四荒八極至らずといふ所なかりけり。ある時西天十万

里の山川を一時に越えて、中天竺の舍衛国に到り給ふ。

時に釈尊靈鷲山にして法華を説き給ふ。穆王馬より下

りて会座に臨んで、即ち仏を礼し奉つて、退いて一面に

坐し給へり。如来問うて宣く、『汝はいづれの国の人ぞ。』

穆王答へて曰く、『吾はこれ震旦国の王なり。』仏重ねて

宣く、『善哉今此の会場に來れり。我治国の法有り、汝

受持を欲せんや否や。』穆王曰く、『願くは信受奉行し

て理民安国の功德を施さん。』爾時、仏漢語を以て、四

要品の中の八句の偈を穆王に授け給ふ。今の法華の中の

經律の法門有りといふ深秘の文これなり。穆王震旦に歸

つて後深く心底に秘して世に伝へられず。此の時慈童と

いひける童子を、穆王寵愛し給ふに依つて、恒に帝の

傍に侍りけり。ある時彼の慈童君の空位を過ぎけるが、

誤つて帝の御枕の上をぞ越えける。群臣議して曰く、『其

の例^{れい}を考^{かん}ふるに罪科^{ざい}浅^{かん}きにあらず。然りと雖も事^{あや}誤^まりより出でたれば、死罪一等を宥^{なだ}めて遠^{えん}流^{りゅう}に処^{しよ}せらるべし。』とぞ奏^{そう}しける。群^{ぐん}議^ぎ止む事を得ずして、慈童^{じどう}を酈^{てい}県^{けん}と云ふ深山へぞ流されける。彼の酈^{れい}県^{けん}といふ所は帝城を去る事三百里山深うして鳥だにも鳴かず、雲^{くも}暝^{くら}うして虎^こ狼^{らう}充滿せり。されば飯^{かり}にも此の山へ入る人の、生^いきて歸ると云ふ事なし。穆^{ぼく}王^{わう}猶慈童を哀れみ思召しければ、彼

の八句の内を分たれて、普^ふ門^{もん}品^{ぽん}にある二句の偈^げを、潜に慈童^{じどう}に授けさせ給ひて、『毎朝に十方を一^{らい}礼^{らい}して、此の文を唱ふべし。』と仰せられけり。慈童遂に酈^{てい}県^{けん}に流され、深山^{しん}幽^{いう}谷^{こく}の底に棄てられけり。爰^{こゝ}に慈童君の恩命に任せて、毎朝に一反^{へん}此の文を唱へけるが、若し忘れもやせんずらんと思ひければ、側^{そば}なる菊の下^{した}葉^はに此の文を書附けけり。それより此の菊の葉における下^{した}露^{つゆ}、僅かに落

ちて流るゝ谷の水に滴りけるが、其の水皆天の靈藥となる。慈童渴に臨んでこれを飲むに、水の味ひ天の甘露の如くにして、恰も百味の珍に勝れり。加之天人花を捧げて来り、鬼神手を束ねて奉仕しける間、敢て虎狼惡獸の恐れなくして、却つて換骨羽化の仙人となる。これのみならず、此の谷の流れの末を汲んで飲みける民三百余家、皆病即消滅して不老不死の上寿を保てり。其の

後時代推移つて、八百余年まで慈童猶少年の貌あつて、更に衰老の姿なし。魏の文帝のとき、彭祖と名を替へて、此の術を文帝に授け奉る。文帝之れを受けて菊花の杯を伝へて、万年の寿をなさる。今の重陽の宴これなり。それより後、皇太子位を天に受けさせ給ふ時、必ず先づ此の文を受持し給ふ。これに依つて普門品を当途王経とは申すなるべし。此の文我が朝に伝はり、代々の聖主御即

位の日必ずこれを受持したまふ。若し幼主の君踐祚ある時は、摂政先づこれを受けて、御治世の始めに必ず君に授け奉る。此の八句の偈の文、三国伝来して、理世安民の治略、除災与樂の要術となる。これ偏に穆王天馬の徳なり。されば此の龍馬の来れる事、併しながら仏法王法の繁昌宝祚長久の奇瑞に候べし。」と申されたりければ、主上を始め参らせて、当座の諸卿悉く心に服し旨

を承つて、賀し申さぬ人はなかりけり。(後略)